

## 自治体による自然保育の推進事例

### 豊かな自然と温かな地域の中で、子どもたちの “人生の根っこ”を育む信州型自然保育（信州やまほいく）

#### 長野県（県民文化部こども・家庭課）

<https://www.shizenhoiku.jp/>（信州やまほいくの郷ホームページ）

#### 自然保育推進の背景

##### 地域の環境や状況

長野県は全国4位の広大な県土を有し、その約8割が森林である。また、多様な地域性（村の数は日本一）や、自然環境を活用した屋外での体験活動を積極的に取り入れている野外保育団体（森のようちえん等）が全国で最も多く存在するなど、子どもの豊かな体験活動に適した環境が整っている。

##### 取組の経緯・背景・沿革等

平成27年4月1日、信州の豊かな自然環境と多様な地域資源を活用した、屋外を中心とする様々な体験活動を積極的に保育・幼児教育に取り入れる園を長野県が独自に認定する「信州型自然保育（信州やまほいく）認定制度」を創設し、現在、信州やまほいく認定園（以下、「認定園」）は210園を数える。

制度を通じて自然保育の社会的認知や信頼性と質の向上を図るとともに、県内の保育・幼児教育に携わる方々が積極的に自然保育に取り組んだり保護者が安心して子どもを託すことができる自然保育環境の充実を目指している。

#### 自然保育推進の具体的取組

信州型自然保育認定制度の認定基準は、安全管理や保育者の資質等に関する24項目からなる。認定の種類は、「特化型」（週15時間以上の屋外体験活動）と「普及型」（週5時間以上の屋外体験活動）の2種類を設けており、一日の大半を自然の中で過ごす「特化型」のほか、他のプログラムと一緒に自然保育にもバランスよく取り組みやすい「普及型」を設定している点が長野県の制度の大きな特長である。

制度創設に伴い、長野県では「人材育成、情報発信、財政支援」の3つの柱を掲げ、認定園の運営安定化や保育人材の確保等を積極的に支援している。

人材育成については、長野県が主催する自然保育研修交流会（年3回程度）を開催するほか、希望する認定園に対して自然体験活動の専門指導者を派遣する事業等を行っている。情報発信については、自然保育ポータルサイト「信州やまほいくの郷」を開設し、認定園の保育事例を掲載するほか、長野県の取組を紹介するセミナー等を定期的で開催している。財政支援については、公的支援のない認定園を対象とした人件費の助成や全認定園を対象とした自然保育活動のフィールド整備（整地、伐採等）費用の補助に加え、幼児教育無償化の対象とならない、認可外保育施設を利用する「保育の必要性の認定」のない世帯を対象とした保育料の助成事業を行っている。

## 自然保育の紹介

### 🍂 認定園(公立保育所)の活動事例

「しぶいて？」どんな味？

11月、散歩に出ると、あちこちに色づいた実を付けた柿の木を目にする。

絵本でもおいしそうな柿を見ている子どもたちは「ほいくえんのかきもたべてみたい！」と言い出した。担任は渋柿と知っていましたが、口にしてみることに・・・

「なにこのあじ!」「くちのなかが、しわしわになる!」との声が上がリ、子どもたちの中に、保育園の柿は食べられないとの思いが広まったのか、みんなシュンとなってしまった。それでも諦められず、絵本を眺め、担任にあれこれ聞いていた。そして口の中がしわしわになるのが渋味ということ、「渋柿・甘柿」があること、渋柿を甘くする方法もあることを知った。話すうちに一人が「うちではおさけかけてるよ!」と言い出したが、さすがにアルコールは使えない。「れいとうしよう!」一カ月の冷凍作戦を選ぶこととなった。

そして一か月後、冷凍庫から出して恐る恐る口にしてみると・・・

「あまい!」「おいしい!」大成功であった。

1人男の子が、皮ごとがぶりっ!「ぐえ～、しぶい・・・」  
(笑)皮までは甘くならなかったようだ。



「しぶい」という感覚を味わった子どもたちは、保育園の柿は食べられないとの思いに。そこで終わらずに同じ柿を甘くすることができるという環境の変化を学んだのである。野には、加工品にはない中途半端な味がある。知らないままに育つより、様々に体験したことがあるって素敵だ。

### 取組の効果

子どもたちが何かをやってみたいと言い出した時、保育者が見守りながららせてみると、自分たちであれこれと工夫して一つの遊びが深まっていく。屋外での体験活動の中で、たくさんのことに気付いたら、それを伝えてもいいと分かってきた子どもたち。子どもの数だけ興味対象があるといえる自然の中で、どんどん自分の好きなものを見つけ、もっと知りたがるようになってきた。認定園からは、このような声が多く聞かれる。

保育者の方からは、信州やまほいくの認定を、主体的な遊び・学びを助けるツールの一つと捉えていただいている。認定を受けたことで保育そのものは大きく変わらないとしても、認定を契機として園全体で今まで気付かなかった自然環境を意識し、主体的な学びにつなげていく姿勢が生まれている。